「おさしづ」語句の探求（12）

第１巻の「刻限」における「道」

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

「おさしづ」（改修版）第１巻では、「刻限」において「道」という言葉が頻繁に用いられている。「刻限」は、「神の特別な思い、実に人間をたすけたいとの上からの止むにやまれない神の思いがいっぱいになって、あたかも、それが堰切って溢れるごとく、積極的に神意のあるところを話されたもの」であり、また、「この旬を逸したら、もはや取り返しのつかない大切な時節に対する神の話」である（『改訂天理教事典』331 ～ 332 頁）。したがって、「刻限」の内容は、当時の時節、つまり、天理教を取り巻く状況と密接に関わるお話であると言えるだろう。

天理教の歴史における、第１巻の時期（明治 20 ～ 23 年）のおもな出来事は、本席定め、教会の設置（明治 21 年４月 10 日認可、４月 24 日東京で仮開筵式、11 月 29 日（陰暦 10 月 26 日）おぢばへ引き移し開筵式）、そして、別席順序、つとめの整備といった事柄である（『稿本中山眞之亮伝』および『教史点描』参照）。そうした時代的な脈絡を踏まえながら、「刻限のおさしづ」を「道」に注目しながら読んでいくと、本席定めの場面では、それほど「道」に関して特徴的な用例があるわけではないものの、教会設置のあたりから、「道」という言葉を用いて、同じような意味の「おさしづ」が繰り返し説かれている。今回は、それを拾い上げてみることにする。

○神一条の道と世界の道

明治 21 年６月８日　御論

「細々ながら、この道皆んな集まる。世界の道に押されるから細々道許した。振り変わると、ころりと変える〳〵。神一条の名揚げ、一つの細々の道、早く、理を早く直せ。」

明治 21 年 11 月 14 日（陰暦 10 月 11 日）午前３時　刻限

「日々の処通り来た、一寸の道を始め掛けた。このくらいの事は言うまでやない。（中略）このやしきに於ては五十年の間、天の理を以て始め掛け。天然自然の道を知らんか。神一条の道、皆人間心勝手の道を、皆んなこれまでの道を聞き分けてくれ。」

明治 21 年 11 月 23 日（陰暦 10 月 20 日）午後９時　刻限御話

「世界一つの道、世界一つの道、今の処一寸の道である。」

明治 22 年４月 17 日（陰暦３月 18 日）午後 10 時 35 分　刻限御話

「今の一時は一寸世界は治まらんから一寸許した道や〳〵。さあ〳〵十分口説き詰めたる道や道や。さあ〳〵〳〵一つの話十分説いた。たすけ一条の道は、どうもならんかいなと言うた日も通り、世界は一つの道があれば安閑なものや。」

明治 22 年４月 18 日　午後 10 時　刻限御話

「さあ〳〵天理教会やと言うてこちらにも始め出した。応法世界の道、これは一寸の始め出し。神一条の道は、これから始め掛け。」

明治 22 年 11 月７日　午後 10 時 40 分　刻限御話

「ひながたの道通れんような事ではどうもならん。長い事を通れと言えば、出けんが一つの理。世界道というは、どんな道あるやら分からん。世界の道は千筋、神の道は一条。世界の道は千筋、神の道には先の分からんような事をせいとは言わん。ひながたの道が通れんような事ではどうもならん。」

「口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。」

○古き道と新しい道

明治 22 年 10 月９日（陰暦９月 15 日）午前１時 40 分　高井猶吉身の障りよりの刻限御話

「さあをやの道を通りながら、をやの道の理が分からん。古き道があるから新しい道がある。古き道はをや、新しい道は子という。さあ〳〵だん〳〵に新しい道を通ろうとするで、古き道が忘れる。よう聞き分け。古き道があるで新しい道という。」

明治 23 年９月２日　夜 11 時　刻限

「新しい道は通りよいと皆思う。なれど新しい道は通り難くい。古き道の理を思え。」

○細い道と往還道

明治 22 年 11 月７日　午後 10 時 40 分　刻限御話

「これではならんという処から、一寸道を開き掛けた。まあ〳〵世界から見れば往還。細道は通りよい、往還通り難くい。」

明治 23 年４月６日　午後 10 時 17 分　伺の後にて刻限御話

「さあ〳〵道や〳〵、どういう道や。細い道、細い道は通りよい、往還道は通り難くい。細い道幾度返し〳〵という。細い道、これまで並大抵やない年限を通りたであろう。細い道は通りよい、往還道は通り難くい。（中略）往還道は世界の道、細い道は心の道、心の道は誠、誠は天の理、天の理であたゑという。細い道を外せばばったりと。早く取り直せ。」

上に記したように、「道」という言葉が、神一条と世界、古きと新しい、細いと往還というように、対比的に用いられていることが目を引く。こうしたお言葉が、明治 21 年４月 10 日に天理教会の設置が認可された後から多く下されたということは示唆的である。それは、天理教会が政府から認可され、各地にも分教会が設立されて、だんだんと天理教が社会的、組織的になっていく時期である。そうした時期に、「世界の道」とか「一寸許した道」というように、そうした組織的になりつつある状況を戒めて、もっと大事な「神一条の道」があると繰り返し説かれている。明治 22 年４月 18 日の「さあ〳〵天理教会やと言うてこちらにも始め出した。応法世界の道、これは一寸の始め出し。神一条の道は、これから始め掛け」という言葉はまさに端的にそうした点を論されている。

同様に、そうした組織的になりつつある天理教会としての歩みは、「新しい道」とか「世界から見れば往還」などとも言って戒められ、それに対して、「神一条の道」、「たすけ一条の道」を通ること、そしてそれは「古き道」、「をやの道」、であり「細い道」を行くことであることを説かれる。親神が望まれる「道」について最も端的に論されているのが、明治 22 年 11 月７日の「世界の道は千筋、神の道は一条。世界の道は千筋、神の道には先の分からんような事をせいとは言わん。ひながたの道が通れんような事ではどうもならん」という、教祖の「ひながたの道」を強調するお言葉であると言えるだろう。